

科目名	戦略情報論特講	担当者	イヌイ 乾 イチウ 一字	期間	通年	単位数	4
-----	---------	-----	-----------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>日本人は国内での政治や企業での権力闘争では情報能力を遺憾なく発揮するが、国際社会における諸行動では他国に一步先んじられている、と言われる。つまり戦略的思考に長けていないのである。本科目はこの欠点克服の一里塚となるものであり、具体的には、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 戦略情報業務(活動)の過程を基本的に把握する。 2. ケーススタディとして、ソ連の情報機関の特色及び国家への寄与を具体的に考察する。 		
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 戦略情報業務(活動)の過程の認識 2. 情報機関の特性及び国家への寄与の把握 		
学修方法	<p>教材及び配布する講義資料、参考資料(講義資料以外の関連資料)をもとにレポートに取り組んで下さい。特に乾作成の講義資料「戦略情報論特講」(本文 46 頁)は重要です。また、参考資料には修士論文作成のためのものもあり、十分活用して下さい。</p>		
スケジュール	<p>レポート最終稿提出期限は学事暦記載のとおりです。その5日前までは積極的な草稿のやりとりを望みます。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	70%	内容は当然ですが、レポートの構成及び論理性を重視します。
	平常評価	30%	極性及び自分で考えているかを重視します。
履修者への要望	<p>これまで、何かの行動をする際、情報を集め、分析・評価して何かを決心して物事に当たってきたと思いますが、それを体系的に学ぼうとするものです。これまで意識したことのない分野かもしれませんが、基本的なことを理論的に学んで下さい。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： ワシントン・プラット(田畑正美訳) 教材名： 『戦略情報—基礎原理とその応用—』(東洋政治経済研究所, 1962年) 1,000円(絶版につきコピーを配布)
	多くの情報(information)が氾濫しているが、それは評価・判定・総合化されて初めて有益な情報(intelligence)となる。この作業の多くは現段階ではコンピュータが介在しにくい分野である。特に国際関係に関する情報は、人間がかかわることから計数処理ができないものが多い。この分野を扱うものが「戦略情報」で、歴史学的手法を採り入れ、主として第二次世界大戦時米国で発達してきたものである。本教材は目的に応じた情報資料の収集、処理方法、将来の予測方法などについて、基礎原理と方法について理論的説明を行っている。
参考図書	A. J. トインビー(松本重治訳)「同時代史の研究—学問的課題として—」『歴史の教訓』(岩波書店, 1957年) 200円。(コピー配布予定) E. H. カー(清水幾太郎訳)『歴史とは何か』(岩波書店, 2003年) ISBN:978-4-00-413001-7 820円+税 今井登志喜『歴史学研究法(新装版)』(東京大学出版会, 1992年) ISBN:978-4-13-023041-4 1,200円
履修上のポイント	情報化社会にあつて、「情報」の意味が多様化しているが、ここで取り扱っている「情報(戦略情報)」は、国際関係を研究する上で、重要かつ不可欠な事項であることを認識して、関心をもって取り組んでもらいたい。 配付する講義資料「戦略情報論特講」により、「戦略情報」について、基礎的知識が得られよう。つまり、情報、戦略の定義に始まり、「戦略情報」研究の有用性、情報活動(分析、総合化などを含む)、情報組織などの概要である。未知のことが多いだろうが、この講義資料から学習を始めて頂きたい。
レポート課題 1	情報活動の過程について述べよ。 留意点 ：基本的に講義資料で十分である。 余裕があれば教材及び参考図書を参考とし、さらに研究、自分なりの理解事項をまとめれば、情報活動の過程をさらに深く認識できよう。
レポート課題 2	情報活動の過程における手法と歴史学的手法との相違について述べよ。 留意点 ：講義資料及び教材で概略の知識を得られるが、それをさらに高めるため、歴史学的手法を参考図書などを参考にしつつ、課題に答えてもらいたい。その際、情報の目的、歴史の目的から思索が始まるだろう。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： ジェフリー・T. リチェルソン(乾一字訳) 教材名： 『剣と盾 ソ連の情報戦略』(時事通信社, 1990年) ISBN:978-4-78-878846-6 2,200円+税(絶版につきコピーを配布)
	本教材はソ連の情報機関とその活動を全域にわたって分析された研究書である。興味本位の通俗書ではない。13章からなり、国家保安委員会(KGB)と軍情報部(GRU)を主体に各種情報機構、スパイ活動ばかりでなく偵察衛星、通信情報、公刊資料、偽情報工作、非公然活動などの情報活動の全領域を明解、綿密かつ客観的に、しかも体系的に記述している。先端技術の入手に関する章もあり、情報大国ソ連の体系的な情報活動を知ることができる。ここで述べられている多くは今日のロシア及び現存する共産主義国にそのまま受け継がれている。
参考図書	中西輝政「国家情報論」『諸君』(文藝春秋社, 2001年2月号~2007年9月号 [10月号以降休載]) (コピー配布予定) ブライアン・フリーマン(新庄哲夫訳)『KGB』(新潮社, 1983年) ISBN:978-4-10-600246-5 1,165円+税
履修上のポイント	日本は他国からの情報活動に対し脆弱な国といわれている。まず情報活動が何たることを知ることから始めねばならない。それにはロシアという情報に長けた国の研究はうってつけである。しかもこれにより、他国の情報活動の理解にも波及しうる効果がある。また、国家の総力を挙げての、大規模かつ長期にわたる組織的宣伝活動や情報操作の現実を知れば、国際社会の厳しい一面を理解できよう。たとえば、ゾルグに代表される政治的に影響力のある重要人物の抱き込み工作の実態を知ることにより、国際政治の分析に深まりが増そう。
レポート課題 1	ソ連の情報機関の特色を述べよ。 留意点 ：個々の情報機関の特色はもちろんであるが、国家としてソ連が情報全般をどのように考えていたかも忘れないように。
レポート課題 2	ソ連の情報機関の国家政策への寄与について述べよ。 留意点 ：一般論とともに、具体例が挙げられればより深い考察となる。